



識聞録

ゴルフビジネスのプロが30年以上回って見て聞いて感じた世界のゴルフ文化をお伝えする新連載。第8回はテレビ中継のお話です。

手作り感が満載だった 78年の全米オープン中継。

全米オープンがマーティン・カイマーの優勝で幕を閉じましたが、私が初めて全米オープンに足を踏み入れたのは1978年のデンバー。78年からNHKでの中継に変わり、私はコディネーターとしてお手伝いしました。80年にニュージャージー州、バルタスロールGCで開催された大会では、ジャック・ニクラウスと青木功さんが初日から一緒のペアリングで、最終日も二人で優勝争いをしたので、日本でも記憶されている方も多いでしょう。

当時は衛星中継の名前のおり、通信衛星を使つての中継でした。とはいえ、当時の日本からのスタッフは実況アナウンサーと解説者、技術担当とディレクターぐらいで、現地の技術の方に一人来てもらい、総勢5名ほどの小所帯でした。ホスト局のABCからアメリカのコミュニティチャンネルに入っていない映像を貰って日本語の中継と解説を現地に入れる簡単なシステムだけに、本当の生放送現場の緊迫感が伝わってきませんでした。おまけに、中継スタジオとは名ばかりで、施設はトレーラーホームの一室にテーブルとモニターを置いて、壁には前日までのスコアや当日のペアリングを手書きにした表を貼付けての施設は手作り感あふれるものでした。地元のレストランに頼んで作ってもらったお弁当やおにぎりがお昼ご飯と言う調子ですから、80年

の大会も青木さんはスタート前には必ずスタジオでおにぎりを食べ、我々と冗談を言いながらリラクセスされていました。その一方でスタジオのモニターに写るグリーン模様に向けられた真剣なまなざしが印象的でした。

ライブ感がおざりなの 日本のトーナメント中継。

さて、現在の中継は日本からも数十名のスタッフが出かけ、専用の中継車とカメラも持ち込んで日本向け映像の制作や解説者のスタジオからの映像などが現地で作られており、衛星回線ではなく光ファイバーの海底ケーブルネットワークを使つて日本に送られています。テレビ画像もハイビジョン化され、ダイナミックな映像を日本でも楽しめます。早くから起きて視聴される熱心なファンも、このライブ感がたまらないのですね。テレビだけでなく、インターネットの活用はアメリカを始めとして欧米各国ではかなり進んでいます。専用のアプリを立ち上げているトーナメントもあり、テレビとネットを同時に使いつながり楽しむことも一般的になってきました。ソーシャルメディアも同様で、テレビを見ながらツイートをするとファンが多く、視聴年齢層もアメリカでは幅広く広がっていますが、やはり生放送でリアルタイムに見る事ができるからこそ成り立つ仕組みでしょう。

国内トーナメントのゴルフ中

Vol.8
テレビの
生中継

徹底してライブ感を 大切にする欧米の テレビ中継。 一方日本のツアーは……



継は、相変わらず録画した最後の数ホールを放送する形式が主流で、協会のサイトで更新されるスコアボードも放送終了まで更新がストップするケースが多いです。詰まるところ、中継の内容や残り時間でほぼ結果が見えてしまい、視聴者が他のチャンネルに切り替えてしまう一因にもなっているのです。スポンサーの関係で表彰式の模様は中継に含まれるのもお決まりで、日本でのトーナメントの人氣が盛り上がりえないのはテレビ中継の姿勢も多く影響していると思います。生中継を行なうには色々な制約は絡むものの、ライブで迫力ある映像を皆さんに見ていただければ、トーナメントの魅力がより伝わり、会場に足を運んでくれる方も増えるはずなのに……とどこかしい気持ちになります。トーナメントの臨場感をいかに伝えていくか、我々放送に携わる者にとつての課題は、ゴルフの未来を占う上でも非常に大切なテーマでもあることを肝に銘じながら、日々業務に向き合っています。

ゴルフビジネスの プロフェッショナル



神野方仁(じんの・みちひろ)
1956年生まれ。テレ・プランニング・インターナショナル株式会社代表取締役社長。国内外の様々なスポーツビジネスに関わり、中でもゴルフはマスターズのようなメ

ジャー大会からジュニアゴルフに至るまで、イベント、放送、広告、マーケティングなどの面に長年携わっている。日記を公開中 Fast Track Michi's Diary
www.tpi-j.co.jp/diary/index.html

イラスト/ソリマチアキラ